

各 位

武雄・杵島地区農業指導連絡協議会
 藤津農業指導者連絡協議会
 杵藤農林事務所

「稲作情報（第8号）、大豆作情報（第5号）」について（送付）

このことについて、下記のとおり「稲作情報（第8号）、大豆作情報（第5号）」を送付しますので、業務の参考にしてください。

気象概況

月	半旬	平均気温			最高気温			最低気温			降水量			日照時間		
		平年 (°C)	R1 (°C)	平年差 (°C)	平年 (°C)	R1 (°C)	平年差 (°C)	平年 (°C)	R1 (°C)	平年差 (°C)	平年 (mm)	R1 (mm)	平年比 (%)	平年 (hr)	R1 (hr)	平年比 (%)
7月	5	27.5	27.0	-0.5	32.4	30.8	-1.6	23.9	24.6	0.7	39.2	161.0	411	32.9	16.3	50
	6	27.8	28.5	0.7	32.9	33.3	0.3	24.1	24.9	0.9	36.3	29.5	81	42.8	46.0	107

7月5半旬の気温は平年並みであったが、梅雨のために降水量・日照時間それぞれ平年比411%、50%で多雨・寡照となった。7月24日に梅雨明けすると、6半旬の天候は高温・多湿で推移した。

1. 情報田の生育状況（調査日：7月30日）

項目 品種 (設置場所)	年次	草丈 cm	茎数 本/m ²	葉齢 L	葉色 SPAD	概 要
夢しずく (武雄市橘町)	本年値	80.5	366	11.2	33.7	葉齢は平年よりやや遅れている。草丈は平年並み、茎数は平年よりやや少ない。葉色は平年よりかなり薄い。幼穂長は2.5mmで、すでに幼穂形成期に入っている。
	平年値	77.9	388	11.8	38.3	
	平年比(差)	103%	94%	-0.6	-4.6	
ヒノヒカリ (白石町新明)	本年値	70.4	408	11.7	38.2	葉齢は平年並み。草丈は平年より高く、茎数は平年よりかなり少ない。葉色は平年よりかなり薄い。
	平年値	65.5	500	11.5	42.2	
	平年比(差)	113%	82%	+0.2	-4.0	
さがびより (武雄市橘町)	本年値	65.6	287	10.7	34.9	葉齢は平年よりやや遅れている。草丈は平年並みで、茎数は平年よりかなり少ない。葉色は平年よりかなり薄い。
	平年値	63.9	469	11.2	40.7	
	平年比(差)	103%	61%	-0.5	-5.9	

注) 平年値はH21～H30の10年間の平均。なお、ヒノヒカリについてはR1より耕作者が変更したため、平年値は参考値とする。

2. 一般田の生育状況

1) 夢しずく

今年度は草丈が平年よりも高くなっている圃場が多く見受けられます。

2) ヒノヒカリ

6月17日頃移植した圃場では、間もなく幼穂形成始期をむかえ、穂肥施用時期となります。7月23日調査時までは葉色が濃く経過していましたが、その後から葉色が淡くなりはじめました。

3) さがびより

6月22日頃移植した圃場では、有効分けつ期を経過し無効分けつ期となっています。

3. 今後の管理

1) 水管理

ヒノヒカリでは幼穂形成始期となり、稲が水を要する時期となります。中干しをしている圃場は入水し、間断灌水を行ってください。今後、高温で晴天の日が続く場合は、田面が白乾状態にならないよう、水管理に努めてください。

2) 施肥管理

夢しずく

穂肥施用時期となっているため、穂肥を実施していない圃場は早急に診断結果を基に施用してください。草丈が80cm以上、かつ葉色が濃い圃場に穂肥を施用すると倒伏の危険性もありますので十分注意してください。

ヒノヒカリ

6月17日頃に移植されたヒノヒカリは、間もなく幼穂形成始期を迎えて、穂肥施用時期となります。下記の穂肥診断基準に基づく穂肥診断を必ず行い、適期に適量の施用となるようにしましょう。

【表 ヒノヒカリの穂肥診断基準】

草丈 cm 幼穂形成始期時	葉 色			穂肥施用時期		
		群 落	SPAD	出穂前	幼穂長	穂肥施用量 (N成分)
80cm以下	淡い	3.0以下	34以下	20~22日	1~2mm	3.0kg/10a
	標準	3.0~3.5	34~38	18~20日	3~5mm	3.0kg/10a
	濃い	3.5~3.8	38~39	16日	5~15mm	2.5kg/10a
	濃い	3.8以上	40以上	15日	15~30mm	1.0kg/10a
80cm以上	淡い	3.0以下	34以下	20~22日	1~2mm	2.5kg/10a
	標準	3.0~3.5	34~38	18~20日	3~5mm	2.5kg/10a
	濃い	3.5以上	38以上	穂肥は施用しない		

3) その他(病害虫)

いもち病

例年いもち病の発生が多い山麓の圃場や、平坦部でも圃場において、葉いもちの発生が見られ、**特に山沿いや山麓部で激発している圃場も散見されます**。間もなく穂ばらみ期(出穂1週間前頃)となる夢しずくで、上位葉に病斑が見られる場合は、穂ばらみ期となる8月10日頃に穂いもち対策の薬剤防除を実施してください。

また、ヒノヒカリやさがびより、ヒヨクモチの圃場でいもち病の病斑が目立つ場合は、一回目の防除にいもち病の薬剤を混合して散布して下さい。一回目の防除以降、穂ばらみ期に上位葉に病斑が見られる場合は、夢しずく同様、穂いもち対策の薬剤防除を実施してください。

発生が著しい場合はオリブライト1kg粒剤を散布して下さい。

ウンカ類

本年はトビロウンカの飛来量が多く、今後、早植え及び普通期水稻で発生が増加し、被害を生じる恐れが高まっています。本年はトビロウンカと競合関係にあるセジロウンカの飛来量が少なく、8月の気温は平年並か高いと予想され、本虫の増殖にやや好適な条件となっており、被害を生じる恐れが高まっていることから、今後の本田防除の適切な実施が極めて重要です。ついては、図1を参考に、圃場ごとの発生状況を確認したうえで防除対策を徹底してください。

コブノメイガ

本種に対しては、発蛾最盛期の7日後(幼虫ふ化揃い期)の防除効果が最も高い。しかし、本年は断続的に飛来がみられたことから、飛来波ごとの幼虫の出現時期は異なると予想されます。このため、発生予測図内に示した、「複数の飛来波の幼虫を、より効率的に防除可能と考えられる時期(防除適期)」を参考に、適期防除を実施する。田植え時期、地域、水稻の品種等の違いによってコブノメイガの発生量は異なるので、必ず圃場ごとの発生状況を確認したうえで、防除対策を講じましょう。

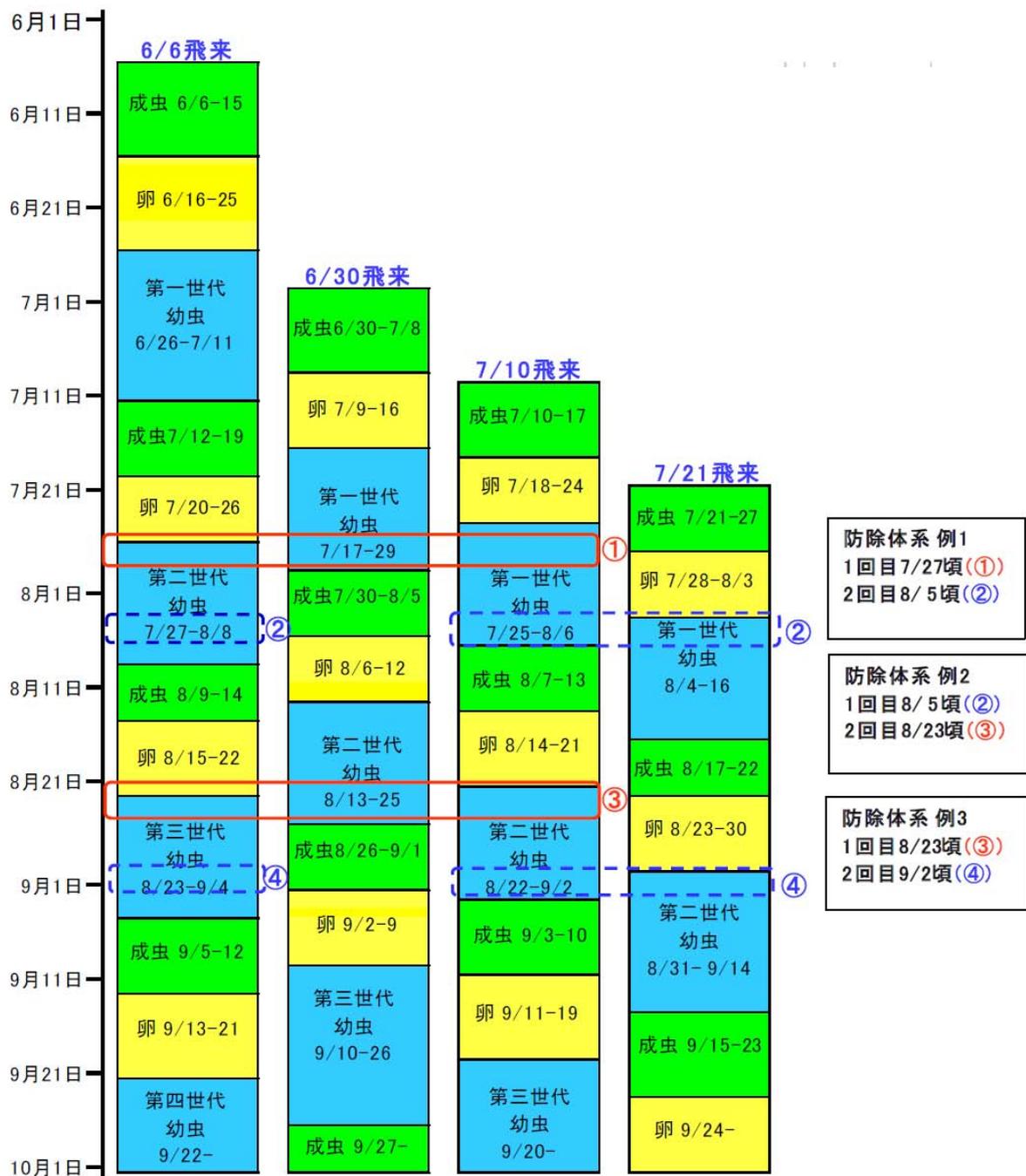


図1 トビイロウンカ各世代の発生予測(第5版、2019年8月1日作成)

- 6月6～7日頃(図では6月6日)、6月30日頃、7月10～11日頃(図では7月10日)、7月21日頃に飛来したウンカを起点とし、有効積算温度と佐賀市川副町の気温データ(第4版では7月22日までは実測値で以降は平年値、第5版では7月31日までは実測値で以降は平年値)を基に作成した。その結果、第5版は第4版と比べ、各飛来虫の、その後の発生時期は約0～1日遅くなったが、全体としてほとんど変わらない。
- 普通期水稲には、6月6日飛来虫は定着していないと考えられる。この例のように、各飛来波に対する防除の重要度は、田植え時期によって異なる。
- 本虫に対しては、幼虫ふ化揃い期の防除効果が最も高い。しかし、本年は断続的に飛来がみられたことから、飛来波ごとの幼虫の出現時期は異なると予想される。複数の飛来波の幼虫を、より効率的に防除可能と考えられる時期として「6/6、6/30、7/10飛来波を対象とした場合を実線赤枠(①、③)」「6/6、7/10、7/21飛来波を対象とした場合を点線青枠(②、④)」で示した。さらに、全ての飛来波を対象とした場合の体系防除の例(1～3)を、本図の右側に示した。
- 田植え時期に加え、地域、水稲の品種、これまでの防除歴等の違いによってウンカの発生量は異なるので、必ず圃場ごとの発生状況を確認したうえで、防除対策を講じる。
- 今後の飛来状況、気象経過に応じて、本図は更新する。最新情報は、農業技術防除センターのホームページで確認する。

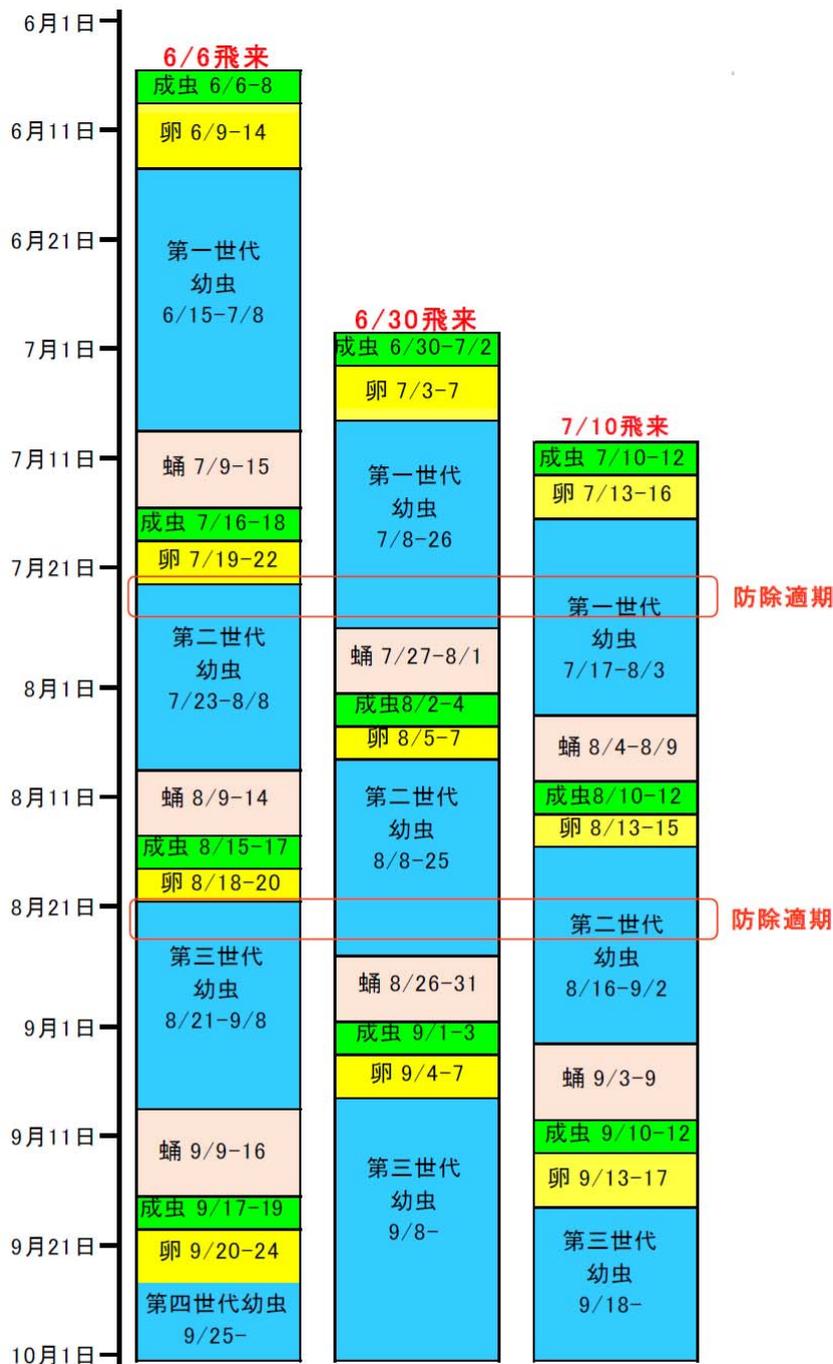


図2 コブノメイガ各世代の発生予測(第4版、2019年7月24日作成)

1. 6月6~7日頃(図では6月6日)、6月30日頃、7月10~11日頃(図では7月10日)に飛来したコブノメイガを起点とし、有効積算温度と佐賀市川副町の気温データ(7月23日以降は平年値)を基に作成した。
2. コブノメイガに対しては、幼虫ふ化揃い期(発蛾最盛期の1週間後)の防除効果が最も高い。しかし、本年は断続的に飛来がみられたことから、飛来波ごとの幼虫の出現時期は異なると予想される。このため、1回の散布で全ての飛来波のコブノメイガを完全に防除することは困難であるが、複数の飛来波の幼虫を、より効率的に防除可能と考えられる時期を、防除適期(赤枠)として図示した。
3. 田植え時期、地域、水稻の品種等の違いによってコブノメイガの発生量は異なるので、必ず圃場ごとの発生状況を確認したうえで、防除対策を講じる。
4. 今後の飛来状況、気象経過に応じて、本図は更新する。最新情報は、農業技術防除センターのホームページで確認する。

4. 大豆作情報（今後の管理）

1) 培土

培土は、土壌の通気性を良くし、地際部分の茎を土で覆うことで新しい不定根の発生も促すため、根重が増え莢数が多くなり、百粒重が重くなり多収となります。大豆の生育量確保と倒伏防止に効果があることから必ず実施しましょう。

培土 1 回目...本葉 2 ~ 3 枚の頃に子葉節の高さまで

培土 2 回目...本葉 4 ~ 5 枚の頃に初生葉節（子葉の上の葉）の高さまで

培土を行う場合は下図のように株元までしっかり土を寄せること。

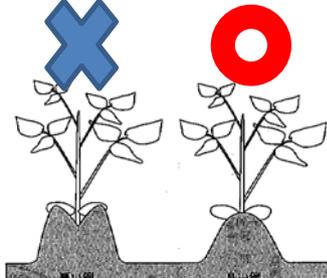


図. 培土における株元への土寄せ方法

2) 雑草対策

イネ科雑草が多いところでは、ナブ乳剤（イネ科雑草 3~8 葉期まで）、ポルトフロアブル（イネ科雑草 3~10 葉期まで）で防除する。なお、大豆パサグランとナブ乳剤の混用は薬害を助長するので避ける。アサガオ類が発生している圃場が散見されるので、圃場内はもとより、まくら地や畦畔で発生している場合も、必ず抜き取るか薬剤散布での防除を徹底する。

出来るだけアサガオの本葉 2 ~ 3 葉までに処理する。ただしアサガオの種類によっては効果が劣る場合もある。

アサガオ類は、繁殖力が強いことからそのまま放置すると次年度以降、さらに発生量が多くなるので、初発での薬剤防除を徹底する。

また、近年ホオズキ類の発生も増加しています。アサガオ類同様、難防除雑草であるため徹底した抜き取り、薬剤散布を行ってください。

除草剤を散布する際は、周りの水稻にかからないよう注意し、無風時に処理する。

【除草剤一覧】

	散布方法	薬量	アサガオ		ホオズキ	ヒユ	イネ科	その他広葉	備考
			つる化前	つる化後					
大豆 パサグラン	全面	100 ~ 150ml / 10a					×	~	だいたいの 2 葉期 ~ 開花前 (雑草生育初期 ~ 6 葉期) ただし収穫 4 5 日前まで
	畦間	300 ~ 500ml / 10a			~	~	×		だいたいの生育期 (雑草生育初期 ~ 6 葉期) ただし収穫 4 5 日前まで
バスタ液剤	畦間	300 ~ 500ml / 10a							収穫 2 8 日前まで (雑草生育初期)
ポルト フロアブル	全面	200 ~ 300ml / 10a	×		×	×	~	×	雑草生育初期 (イネ科雑草 3 ~ 1 0 葉期) ただし収穫 3 0 日前まで
アタック ショット	全面	30 ~ 50ml / 10a	つる化前	つる化後			×	~	薬害あり だいたいの 2 葉期 ~ 開花前 (雑草生育期) ただし収穫 4 5 日前まで